

2019年度はドイツのキール大学近代文学研究科正教授ベルント・アウアーオックス氏のもとでもっぱらドイツロマン派研究に従事した。同氏からキール大学に招いていただいた元々のきっかけは、私が大学院時代にドイツのイエーナ大学に留学していた折に教授主催のゼミナールに参加していたことに遡る。氏は文学ばかりでなく哲学にも造詣が深く、その広い学識に学生時代の私は心惹かれるものがあったので、初年度の在外研究を同氏のもとで行いたい旨申し出たところ快諾され、キール大学近代文学研究所から招聘状を頂戴できた。イエーナ大学で働いていた頃の氏の職格はまだ兼任講師であったが、氏はこの間にキール大学の正教授に就任していた。キール大学はドイツの最北に位置する総合大学であり、もとより私は北ドイツに興味があったので、かの地で在外研究生活を送れることは願ったり叶ったりであった。ドイツ西北端に位置するシュレスヴィヒ・ホルシュタイン州には、州都キール以外にも、ノーベル賞作家トーマス・マンの故郷リュエックや、19世紀リアリズム文学の巨匠テオドール・シュトルムの故郷フーズムなど文学史的にも有名な街が点在していたため、在外研究中には現地の文学館や資料館に足繁く通って見聞を広めることができた。また、キールから電車で一時間もしない距離の場所にドイツ第二の都市ハンブルクがあり、当地のトーマス・マン学会の研究発表会に参加して世界の研究者たちと交友を深めることもできた。しかし、何と言っても研究の本拠地であるキール大学近代文学研究科においてワークショップに参加できたことが一番の経験になった。アウアーオックス教授の計らいで近代文学研究所の言語学科との共催で開かれたRingvorlesungに招かれ、言語学の教授や日本から来た若き学友とも知己を得られたことも刺激になった。

2020年度は研究拠点を西南ドイツの古都ハイデルベルクに移し、当地でカール・シュミットの専門家ラインハルト・メーリング教授（ハイデルベルク教育大学）、およびトーマス・マンの専門家バルバラ・ベスリッヒ教授（ハイデルベルク大学）のもとで研鑽を積む予定であった。しかし、折悪しくコロナ禍に見舞われ、当初の予定は変更を余儀なくされた。ロックダウン中の引越には成功したものの、ハイデルベルクの大学関連施設はすべて閉鎖しており、2019年度に直接会って交流を深めていたデュッセルドルフ在住のメーリング教授やベスリッヒ教授とも2020年度には結局一度も会うことができなかった。ただし、メーリング教授とはその後もメールでのやり取りを頻繁に行った。カール・シュミットやマックス・ウェーバーに関する教授の論考やドイツのコロナ政策に関する記事などをたたき台にして議論を重ねることができたのは有益であった。もっとも、その後コロナ禍に関連した長期滞在延長の問題で役所と揉め事が起き、私とその解決のために弁護士を雇ったことが悪かったのか、それを境に同教授たちとの関係は途切れた。それ以来不本意な研究生活が続いていたが、年明けにハイデルベルク大学の日本学研究所のベッティナー・ヴーテノ教授と偶然出会えたことが転機となった。大学がバックについてことで役所との問題も即座に解決し、その後は同大学の客員教員として日本学における研究と教育に従事した。現地の大学一年生に向けたオンラインによるドイツ語講演（「Die Goethe-Rezeption in Japan」）と研究者向けの日本語講演（『日本浪漫派』発刊の前後）を行い、ヴーテノ教授主催の通訳コースの授業にも参加した。丸山眞男のドイツ語翻訳でも有名なヴォルフガング・シャモニ教授やヴォルフガング・ザイフェルト教授との交流も忘れがたい思い出となった。なお、現地滞在中にドイツでのコロナ体験を記録したエッセイ「コロナ下のドイツ―「ウイルス、科学、そして民主主義」によせて―」を明治大学和泉委員会編『リベラルアーツ・フォーラム』に寄稿した。